

大東文化大学 東洋研究所所報

2020.1 No.72

目次

巻頭言 山田 準……………1	第2回講座概要 滝口 明子……………2
公開講座「アジアの民族と文化」	第3回講座概要 山田 準……………3
第1回講座概要 齋藤 俊輔……………2	2019年度 東洋研究所刊行物……………4

お世話になった大東文化

山田 準

私の名前は、大東文化学院名誉教授を務められた、山田濟斎(本名準)(1867-1952)先生にあやかって付けられた名前です。というのは父が大東文化卒業で、大変先生を尊敬していた事を聞きました。大阪の大学を目指していた一人っ子である私に、自分の母校を勧めました。母は大反対でしたが、可愛い子には旅をさせると、母を説得し、大東時代のことをいろいろ話してくれました。伊勢神宮での裸踊りのこと、諸橋轍次の大漢和辞典の編集のこと、仲小路彰の歴史研究会とGHQによる著書の焚書処分のことなど、学徒出陣で招集された後の戦争についてはあまり語ってくれませんでした。大東文化大学に入学が決まった時は、東京での生活のことや、先輩方のことなど嬉しそうに話してくれました。入学して5月に帯状疱疹にかかり帰阪したときは、母の反対を押し切って東京へ行かせた責任を感じたのか、心配して駅まで迎えに来てくれました。

2年生のとき、ハワイ大学へ語学研修の案内があり、その時も是非行ってこいと送り出してくれました。これがきっかけで、外国のこと、外から日本を見ることに興味が湧き、外国で勉強したいとも思いました。3才の時からヴァイオリンを習わせてくれ、音楽専門の高校へ行きたいと言ったときは、当時の日本の状況や環境についていろいろ説明をしてくれ、普通高校へ行くことを勧められ、大阪でも音楽で評判のいい学校を受けさせてくれ、

高校で合唱に目覚め、大東に入学してすぐに混声合唱団に入部し、定期演奏会には必ず聞きに来てくれ、学指揮としてステージに立った時も嬉しそうに来てくれました。卒業後も現在までOBとして、顧問として大東混声に関わる事ができたのは幸せな事でした。

大学4年生になり、経済学部に大学院ができるという事で、大学院に行くことを勧めてくれたのも父でした。私は大阪に帰って高校の先生を目指して教育実習も大阪でやりました。大学院は出来たばかりで、混乱があり、外部から私の人生を大きく変えて下さった猪谷善一先生に巡り会う事になります。大東に博士課程ができなかったため、猪谷先生がおられた駒沢大学の大学院に入り、先生の最後の弟子として面倒を見て頂きました。父も先生からアドバイスを頂き、この道は早婚か晩婚かになる。早く身を固めさせなさいと言われ、父が積極的に結婚を勧めてくれ、大東の後輩が嫁に来る事になりました。残念ながら父は他界してしまいましたが、因らずも大東の東洋研究所に専任研究員を置くという事で採用され、紆余曲折ありましたが、オランダに1年間研修に行かせていただき、子供たちも青桐幼稚園でお世話になり、大東一家で定年を無事迎えられること、大東文化大学に感謝しております。

(東洋研究所教授 山田 準)

公開講座「アジアの民族と文化」

2019年度（第35）東洋研究所公開講座は、「アジアの民族と文化」を統一テーマに下記の通り開催された。受講者総数は延べ109名で、各講座の概要は以下のとおりである。

◇第1回 2019年11月7日（木）13：00～15：00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：ポルトガルのアジア進出と植民地社会の形成—インドア領の多民族性をめぐって—

講師：齋藤 俊輔（東洋研究所 兼担研究員、大東文化大学外国語学部英語学科 特任講師）

本講座では、これまでポルトガル人が滞在したに過ぎないと考えられてきたポルトガルのインドア領の社会構造を再検討し、さまざまな民族が含まれる社会であったことを明らかにした。

最初にポルトガルのアジア進出と植民地形成の概要について確認した。ポルトガルは、12世紀にヨーロッパ大陸の西端に成立した。ポルトガルがアジアへ進出したのは、隣接したスペインとの対立も一つの要因だった。ポルトガルはスペインよりも早く、海外に拠点を築き、やがてそこに定住し、現地民を支配することで、自分たちの影響力を示そうとしたのである。とくにポルトガルがアジアに作った海外領土はインドア領と呼ばれた。インドア領は要塞、都市、周辺地域などから構成されていた。要塞は城壁で囲まれ、教会や居住地があった。一方、都市は要塞の中にある場合もあったが、ゴアなどではヨーロッパ風の街並みを備えた大きな町になっていた。さらに、要塞や都市の外部には周辺地域が作られた。周辺地域には、現地住民の居住する村落などが含まれていた。つまり、インドア領は拠点というよりも、領土を有するいわゆる植民地であった。

次にインドア領の居住者について詳しく確認した。17世紀の史料によれば、ポルトガルのインドア領には、植民地官僚としてのポルトガル人、定住者としてのカザード（混血を含む）、奴隷（主にアフリカ系）、そしてポルトガル進出以前からいる現地住民がいた。カザードは混血者を含んでおり、ポルトガル系や現地系など分類されることもあった。また、現地住民にしても、イン



ド系といってもさまざまなグループに分かれていた。

そして、最後に植民地の居住者の数と各グループの割合について検討した。まず史料からインドア領には少なくとも15万人以上の人が存在していたことを明らかにした。さらに、そうした人々を分類していくと、ポルトガル人やポルトガル系住民が2割で、奴隷や現地住民が8割という構成になっていたことがわかった。つまり、インドア領の社会は、ポルトガル人やポルトガル系の住民が少なく、アジア・アフリカ出身者が圧倒的に多い社会だったことがわかった。

こうした検討を踏まえ、本講座では、ポルトガルのインドア領の社会が、ポルトガル人だけが居住するようないわゆる単一民族社会ではなく、むしろ多民族社会であったと結論付けた。

◇第2回 2019年11月14日（木）13：00～15：00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：お茶を愉しむ～絵画でたどるヨーロッパ茶文化～

講師：滝口 明子（東洋研究所 兼担研究員、大東文化大学国際関係学部国際関係学科 教授）

お茶は「アジア発の世界飲料」と呼ばれます。美と健康と長寿の飲み物としても、近年ますます注目を集めています。私たちの日常生活にも身近な飲み物である茶は、どのようにして中国、日本、アジアから欧米やアフリカなど世界に広がり、各地域の生活を変えたのでしょうか。人類に豊かな恵みをもたらしてきた美味しい薬・チャを

とおして日本と世界について考えてみたいと思います。

今回の講義では、1) まず、茶の基礎知識を確認した後、主に日本茶と中国茶が、アジアから欧米へ運ばれた歴史の大きな流れを振り返り、2) 次に、ヨーロッパ各地、中でもオランダ、フランス、イギリスなどにおける初期の茶文化の受容と定着の様相を、17～18世紀の

絵画や工芸品の中に辿りました。3) 最後に、「不思議なことに、人類は茶碗の中で出会っている。」Strangely enough humanity has so far met in the tea-cup. (Okakura Kakuzo, *The Book of Tea*, 1906. 明治 39) という岡倉天心『茶の本』の言葉を引用し、東西文化交流史の面白さに触れながらまとめました。秋晴れの日、熱心に聴講して下さい皆様感謝いたします。

以下に取り上げた事項、重要な人名、書物、言葉などを略記します。

- 1) 茶の基礎知識：六大茶類<不発酵茶> 緑茶・黄茶・黒茶(後発酵)<発酵茶> 青茶(半発酵)・白茶(弱発酵)・紅茶(発酵)。茶の古典：陸羽『茶経』(760頃)・栄西『喫茶養生記』(1211)。茶の歴史の大きな流れ：17世紀初めオランダによる茶の輸入開始(日本茶と中国茶)・18世紀にイギリスで大流行(緑茶とポニー茶)・1750年頃ロンドンっ子の挨拶「もうお茶は飲まれましたか」。19世紀前半1800年頃イギリス「茶は国民生活の必需品」。ヨーロッパ諸国で「午後のお茶」。「イギリス人はお茶用のやかんを持って世界の大陸へ出かけて行く」(ゲーテ)。イギリスの植民地インドでアッサム種発見・中葉以降インド、スリランカで茶園開発進む・19世紀後半(インド茶とスリランカ茶 市場進出)
- 2) ヨーロッパの初期の茶論の著者としては、茶とタバコに反対したパウリ(1603-80)、茶を「最も優れた薬草



として礼讃したボンテカー(1647-1685)、日本に滞在したケンペル(1651-1716)(日本滞在1690-92)などがある。イギリスでは、オーヴィントン(1699)、日本の緑茶を愛好したショート(1690?-1772)(1730, 1750)、茶を廃絶すべしと反対したハンウェイ(1712-1786)(1756)、欧州最高の茶論と評されたレットサム(1744-1815)『茶の博物誌』(1772, 1799: 拙訳 講談社学術文庫)などが重要。

- 3) 絵画としては、『お茶を愉しむ～絵画でたどるヨーロッパ茶文化～』(大東文化大学 東洋研究所 2015)の中から、オランダの絵皿(1700頃)、18世紀の家族団欒図、ロンドンの職人たちの茶会など、代表的なものを取り上げて解説。

◇第3回 2019年11月21日(木) 13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：コーヒー文化とオランダ～オランダ東インド会社のコーヒー文化への貢献～

講師：山田 準(東洋研究所 専任研究員、大東文化大学東洋研究所 教授)

まず、コーヒーの起源説について、ヤギ飼いかルディアの話(エチオピア起源説)や、僧侶シェーク・オマールの話(アラビア起源説)について紹介しこれらはキリスト教とイスラム教による起源説であり、人類はもっと古くから、薬用として使用していた事が考えられ、文献に現れるのはアラビアの医師ラーゼスによる薬効としての記述が最初である。

英語で“Coffee”、独語で“Kaffee”、仏語では“Cafe”、蘭語「koffie」と書く語源も。エチオピア南西部にある古くからコーヒーを育ててきた「カファ Kaffa」という地名に由来する説とアラビア語の「カウア Qahwah」に由来するという説がある。「カウア」は人類がコーヒーを飲み始める以前から存在した古い言葉で、その意味は「ワイン」と言われて、糖分を含むコーヒーの赤い実は、その果肉を発酵させてお酒を造っていた。現代は、焙煎したコーヒーで作るカルデアコーヒーリキュールがある。日本にはオランダ語から「可否」「架非」「加非」「哥非乙」「黒炒豆」などの漢字があったが浸透せず、津山藩で医者であり蘭学者だった宇田川榕菴が、コーヒーの



実の付き方から珈は髪飾りと読み、琲はつらぬくとして「珈琲」を定着させた。ちなみに、日本で最初にできたコーヒー店は上野黒門町の「可否茶館」と表記した。

コーヒーの生産は、エチオピアから6～9世紀にアラビアに伝搬し、「アラビカ種」の起源になったとされている。アラビア諸国からヨーロッパへは、10世紀初頭から15世紀ごろに広まり始め、貿易立国であるオランダ

ダの貿易会社は早くからコーヒーに注目し、モカマタリを輸入し、オランダへ苗木を持ち込むが失敗していた。1602年に統合オランダ東インド会社（VOC）が設立されると、商館長付き医師たちは、博物学者でもあり、コーヒー栽培はコーヒーベルト地帯に向いていることを発見する。これによってオランダの植民地にコーヒー栽培を広げ、その苗木はフランスの植民地に伝わり、イギリス領ジャマイカのブルーマウンテンに広がって行った。イギリスではコーヒーハウスが広まり、男たちが入り浸り、女性による抗議運動が起こっている。フランスではコーヒーサロンで、文化人たちの交流の場となっていた。日本には、出島から広まり、遊女や通詞、役人たちが飲み、

「出島絵図」にはキャピタンがサイフォン式コーヒーを飲んでいる姿が描かれている。蘭学者志筑忠雄の訳書「萬国管窺」がコーヒーに関する文献とされており、シーボルトによるコーヒーの効能についての解説などから、当初、薬としてオランダから輸入され、19世紀後半から嗜好品として流行し始めた。

最後に、オランダはモーニングコーヒーで、午後ティーが原則であること、オランダでのコーヒーショップでは大麻が売られていること、ダッチコーヒーはオランダにはないことなど、現代のコーヒー事情についても解説した。

2019年度 東洋研究所刊行物

- ・ 東洋研究 第212号（2019年7月25日発行）
- 第213号（2019年11月30日発行）
- 第214号（2019年12月25日発行）
- 第215号（2020年1月25日発行）
- ・ 「大野盛雄 フィールドワークの軌跡 IV
—乾燥地域の「米の道」 稲作から米の料理まで1988～1993年—
(東洋研究所研究班 2020年3月発行予定)
- ・ 「藝文類聚」 卷四十八 訓読付索引 (東洋研究所研究班 2020年3月発行予定)
- ・ 「茶譜」 卷十一（下） 注釈 (東洋研究所研究班 2020年3月発行予定)
- ・ 「天心をめぐる人々」 (東洋研究所研究班 2020年3月発行予定)

この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■(有)池上書店

〒175-8571 板橋区高島平1-9-1 大東文化大学2号館B1
TEL: 03-3932-7567 FAX: 03-3932-7544
E-mail: ike-book@smail.plala.or.jp

■汲古書院

〒102-0072 千代田区飯田橋2-5-4
TEL: 03-3265-9764 FAX: 03-3222-1845
E-mail: kyuko@fancy.ocn.ne.jp

■大東文化大学内購買部(株)進明堂書店

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560
TEL: 0493-34-4430 FAX: 0493-34-5622
E-mail: info-daigakuten@shinmeido.co.jp

■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平1-10-2
TEL: 03-3937-0300 FAX: 03-3937-0955
E-mail: tokyo@toho-shoten.co.jp

大東文化大学 東洋研究所 所報 No.72

2020年1月25日発行

印刷: (株) 東京技術協会

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10

TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756

E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>